

捧げられた肉の胚——辻本 佳の「Field Play #2 擬態と遊行」

## F. アツミ (Art-Phil)

おそらくは山の森の奥深く、川のせせらぎが滞留するところで、裸の人が彷徨う。ステージのそこ-ここに置かれた流木や石は不気味に白い輝きを放つ。その森がまだ木立の集まりであった頃、はるか昔に存在していたであろう幻獣の骨を思わせるかのように。辻本 佳の「Field Play #2 擬態と遊行」において試みられたのは、自身の出生の地、熊野をめぐる自然の記憶、人々の歴史、そして神話的な物語の混融であったといえるだろう。

機械的な振動音が歪められて川のせせらぎを模倣し、森に棲まう鳥たちのさえざりが流れ込み、街の喧騒が遠くからこだまする。流木を持ち上げ、抱きかかえ、肩に担いで歩く裸の人をとり囲むサウンドスケープは、裸の人が森や川のなかで知覚した固有の時空間、あるいは環境世界となって現れることになる。裸の人は汗を流して歩きまわり、呼吸を乱し、あてどなく石を積む。不条理に続けられる営為を前に、開墾から開発へと至る、人類の自然への暴力を見出すこともできたかもしれない。

裸の人の身体に目を向けよう。隆々と波うつ筋肉は金属質な印象とともに運動し、単調ながらも微細な表情を垣間見せるノイズの波に揺られるかのようにかたちを変えていく。いびつな光の屈折をまとう筋肉の褶曲は肉の胚となり、森なかを吹き抜ける風、川のなかに潜む流れ、流木や石を形成する力そのものの運動を擬態する。その擬態の上演から遊行されるのは、自然それ事態の生成の過程であり、裸の人が生きた自然との衝突と癒合の記憶だろう。そこから垣間見られるのは、人が自然になることの過程、あるいは神話的世界の上演ともいえるものだ。

裸の人は自らを打ち、官能的な音を発する。それは振動とともに呼吸し、妖しく散光を放つ。顔に触れ、胸を殴り、腹を抱え、うずくまる。流木を喰らい、石を積む。そこで人は幻獣になり、創生の神となる。破壊と生成の陰りのなかで睦まれる、生と死の呼吸がある。あたかも自然の殺戮の前の生贄を、そして建立の後の供犠を体現するかのように。観衆はいつの間にか、山の森のもっとも奥深く、川のせせらぎが留まるところで起こる肉の密儀に立ち会うことになっただろう。

初演作「Field Play #1 どうすれば美しい運動が生まれるのか。」と写真展「Field Play #3 Peatbogs」をつなぐかたちで提出された辻本 佳によるフィールドワークのブリコラージュは、その繊細な感官と豊かな運動を備えた身体を通して、人と世界の交響を密かに紡ぎ出す。劇場を祭壇として機能させることを試みたという本作において、辻本 佳の身体は神話的な世界観をまとう肉の胚となって熊野の自然へと厳かに捧げられた。